

さわやかトカラ情報

十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL 099-227-9771

一隅を照らす十島の教育

10月...LED

十島村教育長 有村 孝一

10月7日午後7時前。テレビにニュース速報が流れました。スウェーデン王立科学アカデミーは7日、今年度のノーベル物理学賞を、実用的な青色発光ダイオード(LED)を開発した赤崎優・名城大学教授と天野浩・名古屋大学教授、中村修二・米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授に授与すると発表した。平成24年にiPS細胞の開発で医学生理学賞を受賞した山中伸弥・京都大学教授以来の快挙でした。それ以上に素晴らしかったのが、赤崎教授が、鹿児島県南九州市の出身だということです。県民としてこの上ない喜びでした。教授が大龍小学校・甲南高校の卒業生ということを知り、ノーベル賞がなんだかすごく近いものに感じられました。

この発明がどんなにすごいことか。改めて確認してみると、青色の登場でLEDは赤、緑とともに光の三原色がそろい、用途が拡大したということです。しかも消費電力が少なく、耐久性が高い特長が注目されています。白熱電球や蛍光灯に代わる白色照明のほか、携帯電話などのディスプレイ、交通信号などに広く利用されているということです。まさに、私たちの生活に深くかかわっているということがよくわかりました。また、宇宙でも使われているということですから夢がどんどん広がっていきます。

LEDは先に赤色や緑色が開発されて、電気機器の動作表示ランプなどに使われてきましたが、青は素材の結晶作りが難航し「20世紀中は無理」と言われたそうです。赤崎教授は昭和48年に青色LEDの開発を始め、昭和64年に、天野教授らと青色LEDの開発に世界で初めて成功したということです。青色LEDは急速に普及して製品化されました。その後赤崎教授らは半導体で青色レーザーも開発し、この技術を発展させた青紫レーザーにより、光ディスク「ブルーレイ」も実用化されました。

授賞式は12月10日にストックホルムで行われるということです。自分のことを信じて、一つのことに努力し続けるということは、計り知れないものがあります。今後、鹿児島から、十島から、教授に続く人が出てくることを期待したいと思います。

More light,
less cost.

★ホームステイの思い出★

鹿児島中学校2年 西 いつき

僕がホームステイに行くことにしたきっかけは、母から勧められたからです。僕はずっと鹿児島で育ったので、中学卒業後に母が心配に思っていることがありました。それは、同じ年頃の集団の中や、親や親しい人が一人もいない所でうまく生活ができるかということです。母が僕に勧めてくれた理由は、これらの練習としてホームステイがぴったりだと考えたからでした。参加のために早いうちから母の協力の下に英語の勉強をしました。僕は小学校6年の1学期に英検5級、今年の1学期に3級に合格し、英語に少し自信がついてきて、今回のホームステイに参加する決心も固まりました。

僕のホストファミリーはカリフォルニア州のサンタローザ市に住むリンハート一家でした。毎週末、みんなでドライブをしたり、ショッピングモールやバッシングセンターに行ったりして楽しみました。また、夜にはホストファミリーの知り合いや親戚が集まって、ホームパーティーが開かれ、アメリカ人の友だちや知り合いをたくさん作ることができました。一緒にステイしていた沖繩のカズキ君とホストファミリーに日本食もつくりました。特に肉じゃがが大好評でした。日本で何度も練習しておいて良かったなと思いました。

平日は、8時半にサンタローザグループ30人ほどが、学校に集まります。アメリカ人の先生二人が、英語を使った授業や研修の引率をしてくださいました。中でも、ゴールデンゲートブリッジを観たり、フィッシャーマンズウーフでランチを食べたりしたサンフランシスコ研修は最高に楽しく、忘れられない思い出になりました。

僕のホームステイの目的は「自立」でした。結果は、頼れる人が見つかると思ったりはしたけれども、「自分でできることは自分の力で」という意識は高まったと思います。最後に今回のホームステイで僕をバックアップしてくださったたくさんの方々から感謝したいです。いつか恩返しができるように、この経験を役立てていきたいです。(※サンタローザはスノーピークの聖地と言われています。)



シリーズ——十島の学校にやってきて



中之島小学校 1年 藤谷 拓斗

僕は、5さいのときに、なかのしまにきました。はじめはちいさなしまだなどおもいましたが、すんでみると

すてきなところがたくさんありました。一ばんすきなのはうみです。なつにはまいにちおよぎにいきました。もぐってあそぶととてもきもちがいいです。もうひとつは、かいほつセンターのちかくのちいさなやまです。ちかく



にいるトカラうまやまわりのけしきがみえてきれいだなどおもいます。がっこうではずこうのじかんがすきです。いろいろなものをつくるのがたのしいからです。さかあがりもできるようになりました。つぎはいちりんしゃをひとりでのれるようになりたいです。ぼくはなかのしまがだいすきです。これからもいろいろなたのしいばしょをたくさんみつけないとおもいます。

【子どもたちの作品】①

平島小学校諏訪之瀬島分校6年 山中 雪嘉
(平成26年4月20日南日本新聞掲載)

「なりたい自分」

私は小学校高学年の6年生になりました。5年生の時は、下級生が4人だけでしたが、この春より、1年生と5年生が入ってきて、下級生が7人に増えました。4人でも精一杯だったのに7人となり、上級生としてもっとがんばらなれないかと思いました。だから、私はこれまでの自分ではなく、もっと自分に厳しく、人に優しくする人になりたいです。この言葉は、5年生の修了式の時、白石先生に教えてもらいました。その時、私はそんな人になりたいなと思いました。そのために、1学期は上級生として下級生に物事をしっかりと伝えたり、優しく教えてあげたりしたいです。具体的には、人に説明することが大の苦手なので、国語をしっかりと勉強して説明が上手にできるようにしたいです。また、言葉で伝えられないことは、積極的な姿勢や行動で、下級生にしっかりと伝えられるようにしたいです。



【子どもたちの作品】②

鹿児島小学校6年 有川 雅
平成26年8月19日南日本新聞掲載)

「あおぞら活動」

1944年8月22日、鹿児島市の北西10キロの地点で、アメリカの潜水艦の魚雷攻撃を受け、沈没し多くの人が亡くなった「沖繩の学童疎開船・対馬丸げき沈事件」から70年目を迎えます。鹿児島小学校では、いれいひのそうじをし、ぎせいしゃのめいふくを祈る「あおぞら活動」をしています。今は小中学生合わせて5人です。人数が少なくなっても、新しくメンバーが変わっても、あおぞら活動の意義は伝えなければいけません。だから、対馬丸のことについてよく知るために、DVDや資料であらためて勉強しました。8月22日のいれい祭では、私たちと同じ年齢の多くの人が亡くなったこと、今も船体が鹿児島沖の海底に沈

んでいることを考えながら、一生懸命、心を込めて活動しようと思っています。今でも戦争をしている国があります。戦争をやめ、みんなが安心してらせる世界ができることを願っています。



十島村の小・中学校からのメッセージ ③

宝島中学校 教諭 今村 敏子

「これは私に対するメッセージに違いない。やってやろうじゃないか。」と前向きに気持ちを奮い立たせてくれる大切な言葉だと、すぐさまペンを取り出しメモを取った。『苦手なことに立ち向かう勇気が新たな人生を切り開く力となる。』新年を迎えたばかりの1月3日、フェリーとしまの乗船券購入窓口の壁に貼ってあるカレンダーに書かれたその言葉は、まっすぐに私の目に飛び込んできたのである。



昨年5月、専門の数学以外に家庭科も任せられ、慣れない中での授業をしている頃、翌年度の教科担当の話があった。更に臨時免許を取って授業をしなければならないのだという。早めに心づもりをして準備をしておくことが、負担を少しでも軽くすると頭では分かっているが、クラス減にさえならなければという思いもあり、現実を受け入れられない自分がいた。そんな矢先、『さわやかトカラ情報』に、ある先生が書かれた次の記事が載った。「今は専門ではない英語や数学も担当していますが、他教科がこんなに面白いとは思いませんでした。教える側として、できる限りの教材研究を行うと同時に、過去の自分を乗り越えられる時間を楽しんでいます。」なんて素敵な考え方のだろう。

現在、国語・音楽・家庭と3教科の指導法を熟読し、分からないことは調べ、できる限りの教材研究をして授業に臨んでいる。日々教材研究に追われながらも、十島の学校へ赴任しなければこんな経験はなかったであろうと思えるようになり、自分の成長を感じる充実した日々を過ごしている。十島に来て一年半以上過ぎた。1年目は慣れることで精一杯だった。2年目の今年は、郷土料理を作ったり、魚釣りやニシ(ニシ貝)捕りをしたり、島民の方に教えてもらいながら、今ここでしかできないことをやりたいと思っている。

教職員仲間である「あなた」への私からのメッセージ

子どもを安心して遊ばせることができる。子どもが大切にされ、地域ぐるみで育ててくれる。海で泳いだり生き物を捕まえたり、子どもが自然の中で楽しく遊べる。十島の7つの島は、子育てに最良の環境です。

